

新体操競技の個人演技における構成要素に関する研究

高橋 衣代

I はじめに

新体操競技はフランス語でRythmique Sportive Gymnastiqueと呼ばれ、ロープ、フープ、ボール、クラブ、リボンなどの手具を使用することを特徴としたリズムカルな体操である。

1963年に第1回世界新体操選手権大会がハンガリーのブタペストで行われ、当時は個人競技のみが行われ、種目はフープと徒手であった。

その後2年ごとに世界選手権大会が開催され、1971年から徒手の種目がなくなりロープ、フープ、ボール、クラブ、リボンの種目のうち4種目による個人総合が定着してきた。

新体操は現在、手具を使用し身体活動の徒手運動による芸術体操として知られている。また、1984年オリンピックロサンゼルス大会に始めて個人種目が行われ1994年、オリンピックアトランタ大会では個人演技に加え、団体演技も行われるようになった。

新体操は採点競技であり、採点規則に基づいて勝敗が決定されている。従って、新体操の発展に採点規則は不可欠の要素である。採点規則における得点の比例配分の変更は、選手の演技構成に影響を及ぼし、演技構成の変化と技術の向上へと反映している。オリンピックアトランタ開催後、採点規則は改正された。新体操において、ステップ、ジャンプ、胴の前屈、後屈、回旋、振動、波動、回転などの運動を徒手要素と呼んでいる。この徒手要素が基礎的な運動要素であり、手具を操作する内容を手具要素と呼び、徒手要素との調和が必要とされる競技である。

この手具要素と徒手要素がどのような役割をもっているのか、1984年のロサンゼルス大会と1996年の

アトランタ大会の個人演技について、両大会に共通したボールの種目を取り上げ、構成内容について優勝者の演技構成と、日本代表選手の演技構成を分析した。過去12年間で構成要素はどのように変化してきたのか、演技の構成に何が重要であるのか、採点規則の変化も考慮しながら構成内容と構成方法について比較研究する。

II 研究方法

1. F.I.G. (Fédération Internationale de Gymnastique 国際体操連盟) 採点規則1982年度版と1994年度版をもとに、以下の構成内容について比較検討。

- 1) 構成内容の点数配分について
- 2) 演技構成に必要とされる要素について
- 3) ボール種目の要求要素について

2. オリンピック・ロサンゼルス大会(1984)およびアトランタ大会(1996)におけるボール演技を解析し、比較検討。

a. 解析方法

各大会のボール演技収録VTRをもとに、執筆者独自の記号を用いて解析。

b. 対象

- 1) ロサンゼルス大会優勝者ロリー・ファン選手(カナダ)、8位山崎浩子(日本)
- 2) アトランタ大会優勝者エカテリーナ・セレブリヤンスカヤ(旧ロシア)、18位山尾朱子(日本)

c. ボール演技解析の観点

- 1) 各選手の徒手内容について
- 2) 各選手の構成内容と技の難度について
- 3) 各選手の難度配分について

記号							
内容	ジャンプ	連続ジャンプ	ジャンプターン	バランス	Y字バランス	爪先立ちMG バランス	踵つきMG
記号							
内容	ピボット2回転	ピボット1回転	もぐり回転	柔軟	身体上のころがし	床上のころがし	投げ
記号			A	B	C	D	L
内容	つき	リズムカルなつき	A 難度	B 難度	C 難度	D 難度	左手
新体操演技の構成内容および難度の執筆者独自の略記号							

Ⅲ 結果考察

1. 採点規則改正にみられる構成要素の変化

1) 構成内容の点数配分について

1982年度版と1994年度版のF.I.G.採点規則で構成内容について比較した。1982年度版では、構成と実施を合計して10点満点となっている。そのうち構成は7.00点、実施が3.00点である。

1994年度版では構成と実施合計して10点満点で同じだが、構成点4.80点ボーナス加点0.20点合計5.00点、実施は4.80点ボーナス加点0.20点で合計5.00点、構成と実施の合計点が10.00点である。

1982年に比べ、実施が50%となり、構成と実施が平等な価値があるようになった。このように、構成の価値と実施を同格と考えることは、平均的で、より平等に評価されるために有効であり、違うのはボーナス加点が入ったことである。

構成のボーナス加点については、独創性として0.10点のボーナス加点が与えられる。独創的な構成とは伝統的、古典的な型の枠外に成立するものである。新しい要素、または、選手と手具の関係にお

る新しさ、または、すでにある要素の新しい実施方法、あるいは、すでにある要素の新しい方法による組み合わせである。独創性とは、新しさの追究であり、技術の創造ということである。

構成が全体的にオリジナルなものである場合0.10点が与えられる。ロサンゼルス大会までは、規則に定められた内容を演技構成し、オリジナリティがある演技であっても価値が認められなかった。さらに、1982年までは、この配分された内容のみで減点すべき事柄について減点方法で行っていたが、1994年では従来の減点方法に加えて加点方法が取り入れられ、より多くの難度が追加されたとき追加の難度に対して0.10点が与えられるようになった。2個のB.CまたはD難度があった場合、ボーナス加点が得られる。これは、徒手の能力が高く、構成に多くの難度を入れる事に価値を認めたことになる。また、実施においても一般的な技術は1982年の9.70点の中では従来通り規則に基づき減点方法であったが、1994年ではリスク注1) や熟練度注2) があれば加点されるようになった。この事は審判技術をより正確にす

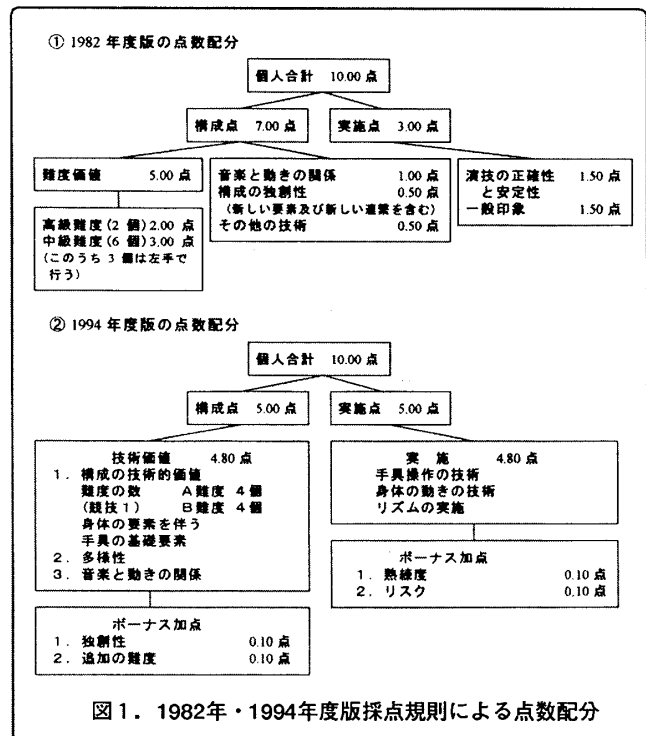


図1. 1982年・1994年度版採点規則による点数配分

る上でもより良いと言える。また、演技構成の上でも、規則の内容を踏まえ、より高得点に結び付ける上で、ボーナス加点は重要な因子であると言える。

表1. 採点規則による徒手内容と難度の数とレベル

1982年年度	1994年年度
<p>徒手 (技術) 徒手の諸要素群 ・各種の移動 ・振り及び回旋 ・腕の屈及び波動(蛇動) ・バランス ・回転及びピボット ・ジャンプ 以上の要素はいくつかの方向、いくつかの面、移動を伴うあるいは伴わない、片足支持あるいは両足支持、腕の動きと結びつける等の多様な動きを考慮に入れて実施することができる。</p>	<p>徒手 (技術) 身体の動きの要素群 以下の身体の動きの諸要素は、いろいろな方向、いろいろな面、移動する・しない片足支持または両足支持、腕の動きと結びつける等の多様な動きの中で実施され得る。 基礎要素群 ・ジャンプ ・バランス ・ピボット ・柔軟性/波動 その他の要素群 ・移動 ・スキップ ・振り及び回旋 ・回転</p>
<p>(難度の数及び左手の難度) 高級難度 中級難度 最低8種類の難度を含まなければならない。 高級難度 2個 中級難度 6個 計8個 8個の難度のうち少なくとも3個は左手で実施されなければならない。</p>	<p>難度の数とレベル A B C (A+B) D (B+B) 競技Iに必要な難度の数 A難度 4個 B難度 4個 計8個 B難度 ジャンプ ピボット バランス 自由選択</p>

2) 演技構成に必要な要素について

(1) 1982年では、次のことを構成に要求している。

- ① 要素の選択として、各手具に特徴的な要素(各手具に要求されているもの)を盛り込み、かつ、歩き、または駆け足での移動、スキップ、ジャンプ、回転、ピボット、バランス要素、柔軟の要素等を組み合わせ入れるようにしなければならない。それらの諸要素を通じて選手は自らの調整力、巧緻性、柔軟性を発揮し、力強さ、スケールの大きさ、スピードという三者間の緊密な関連を披露すること。
- ② 難度の数、及び左手での難度
- ③ 準アクロバット要素
- ④ 音楽との関係

(2) 1994年の構成に要求しているものは次の通りである。

- ① 難度の数とレベル
難度にはA難度、B難度、C難度、D難度の4レベルがある。1つの構成には4つのB難度が必要である。この内3個はジャンプ、ピボット、バランスとの関連において実施されなければ

ならない。他の1個は自由選択である。自由選択は柔軟でもよいし、3個の(ジャンプ、ピボット、バランス)B難度の種類で使ったものと異なる必要がある。更に、4個のB難度の内1個は左手で行う必要がある。

- ② 手具を用いての諸要素の選択
それぞれの手具に特有の諸要素群のすべてから万遍なく選ばなくてはならない。
- ③ 身体の動きの諸要素の選択
移動、ジャンプ、ターン、ピボット、柔軟性の要素などの身体の動きと組み合わせられて手具要素が行われる。手具と関係なく実施された身体の動きの難度は全て難度とはみなされない。
新体操の構成要素のなかで、身体の動きと手具の調和が重要視されていることを示している。
- ④ アクロバット要素は、3種類のみが許可されている。

表2. 1982年度版の採点規則によるバランスとジャンプの難度例

中級難度	高級難度
<p>バランス バランスの諸要素は、片足・ひざ・臀部など身体の一部を用いた支持が要求される。 各要素とも1秒間バランスを保つこと 1. さまざまな姿勢での爪先バランス 2. 爪先での前方、後方、及び側方バランス 3. 前屈バランスから半回転して背面屈バランスをする 4. 手による支持なしの片膝バランス 5. 手による支持なしの臀部バランス 6. 片足バランスで、もう一方の脚を水平に上げ、前後に動かす 7. 片足バランスで、もう一方の脚を垂直軸まで開脚する(前方または後方に)</p>	<p>各要素とも2秒間バランスを保つこと 1. さまざまな姿勢での爪先バランス 2. 爪先での前方、後方、及び側方バランス 3. 前屈バランスから半回転して背面屈バランスを行う 4. 手による支持なしの片膝バランス 5. 手による支持なしの臀部バランス 6. 爪先バランスで、もう一方の脚を水平に上げ、前後に動かす 7. 片足バランスで、もう一方の脚を垂直軸まで開脚する(前方または後方に)</p>
<p>ジャンプ 1. 前後開脚跳び はさみ跳び 閉脚跳び等 2. 空中での身体の動きを伴うジャンプ(例:ジャンプして片脚を曲げ、上体を伸ばす) 3. 垂直ジャンプをしながら空中で半回転する</p>	<p>1. 中間にステップを入れない連続ジャンプ(最低2回) ・単純連続ジャンプ(同じ種類のジャンプ) 例:右足で踏み切ってジャンプし右足で着地、再び左足で踏み切ってジャンプし右足で着地する ・複合連続ジャンプ(異なった種類のジャンプ) 2. 空中での大きな上体の動きを伴う大きなジャンプ 3. 前後開脚跳びをしながら空中で脚を換える 4. 前後開脚跳びをしながら空中で1回転(あるいはそれ以上)を行う 5. 垂直ジャンプをしながら空中で1回転(あるいはそれ以上)を行う</p>

⑤ 構成における多様性

これは手具要素の多様性と身体の動きの要素の多様性の両方である。

⑥ 力動感（ダイナミズム）の多様性、空間使用の多様性

⑦ 伴奏音楽

⑧ 独創性

⑨ リスク

⑩ 追加の難度

基礎要素群は、難度要素に結び付き、難度価値が与えられる。また、手具要素を伴い、難度として数えられる。しかし、その他の要素群は、動きの流れをスムーズにしたり技と技をつなぎ合わせたり、移動によってスピードの変化を出して、よい構成に導く要因となるが、難度要素とはならない。

これが、1982年と大きく異なる所である。

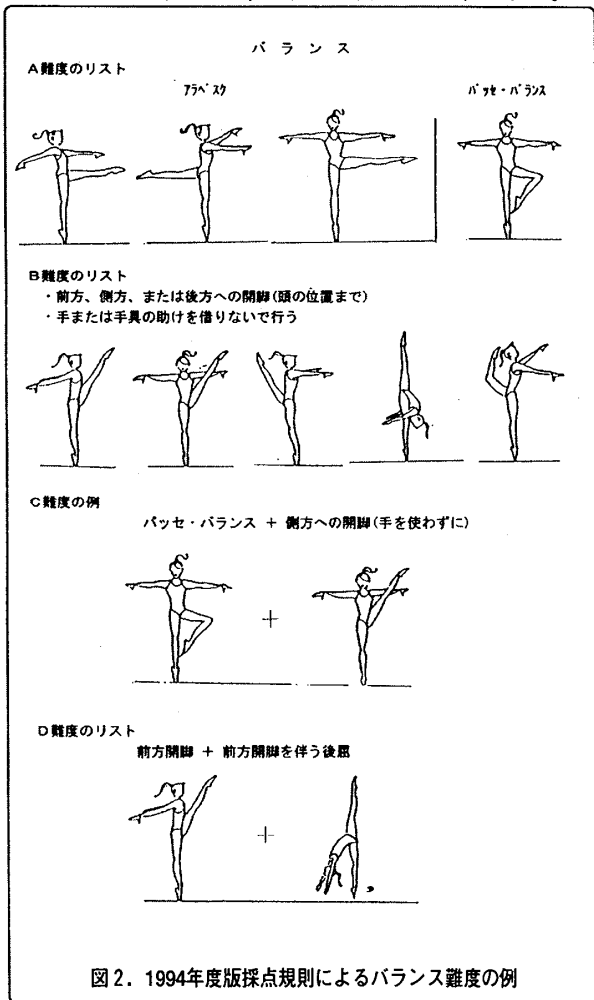


図2. 1994年度版採点規則によるバランス難度の例

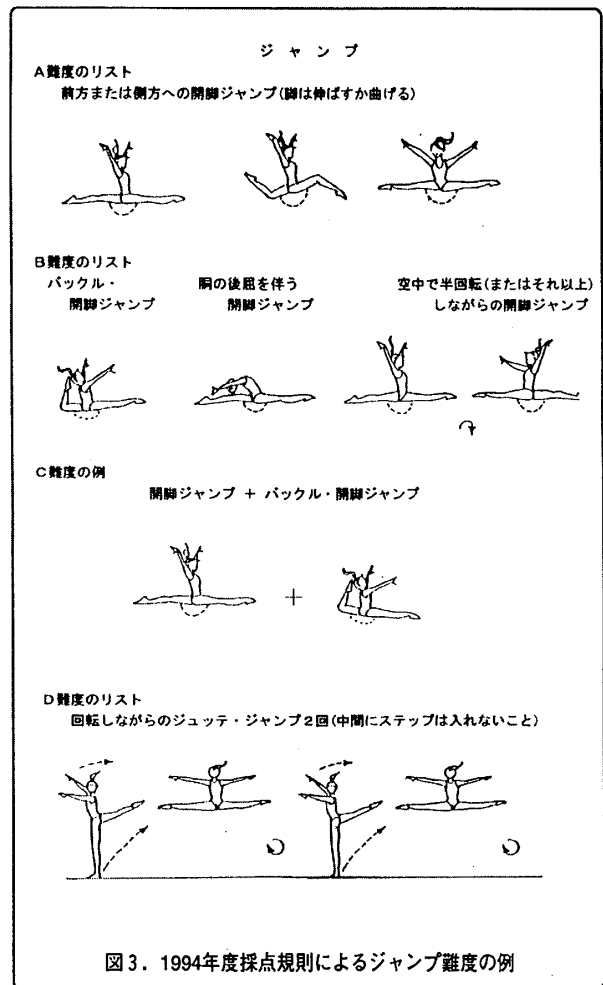


図3. 1994年度採点規則によるジャンプ難度の例

難度価値は1982年では中級難度、高級難度と分かれており、高級難度2個・中級難度6個の最低8種類の難度を必要とする。1個は左手での高級難度が要求されている。

1994年になると、A難度、B難度、C難度、D難度の4段階になっている。図2、図3でもわかるようにバランスについては、1982年では、片足、膝、臀部、など身体の一箇所を用いた支持が要求され、中級難度は1秒間バランスを保つ、高級難度は2秒間保つことが要求されている。この時は、上げる脚の角度や形は決められていない。1994年には脚の角度によって難度価値が決められ、より明確な形を実施することを要求されている。

ジャンプについては、1982年では、前後開脚跳び、はさみ跳び、閉脚跳び等が中級難度、中間にステップを入れない連続ジャンプ(最低2回)が高級難度になっている。これが、1994年になると、図3のよ

うに多様な形と方法により難度が形成されている。

例えば、バランスで脚の位置を高く保つためには、柔軟性、筋力、調整力等の運動能力を必要とする。ピボットの回転についても形を正確に保ちながら回転し、360°、720°あるいは、それ以上回転するためには基礎的な運動能力のほかに、クラシックバレエで行われている脚の保ち方、足首の形、ピボットの方法等のバレエの基礎要素も必要であると考えられる。

柔軟性を考えてもそうであるが、1994年にいたっては形の明確さとともに、身体を屈曲させる角度の大きさや脚の方向も、前後、左右、斜めなど他方向へ、多様に行うことが必要とされてきた。同じ形や方法が1個つの難度にしか数えられないため、徒手能力も偏らず、構成に取り入れなければならないようになった。この点も大きく変化してきたところであろう。上げた脚の角度が下がってしまったり、ピボットの回転度数が少なかったり、爪先が途中で降りてしまったりすると難度として数えられないことは選手の能力を高め、より高度な技術へと導くことになる。また、この不正確な実施は、減点となり実施点も低くなってしまふことになる。

1994年になって大きく変化していることは、各徒手要素の多様性である。例えば、ピボットにおいて、1982年では、種類が少なく回転、及びピボットでは、回転は両足で行い、ピボットは片足で行っていた。1994年では、パッセ、アラベスク、アチチュード、フェッテなど色々な形のピボットがある。これは、全て爪先立ちで行うものである。また、ジャンプでの空間姿勢の正確さが違ってきている、高くジャンプすることが条件とされてきているし、形も開脚、バックル、コサック、回転ジャンプ等多様性にわたり技術が成長してきていることがわかる。

この多種類にわたる徒手要素は構成のなかで、徒手要素の選択の多様性をもたらし、徒手能力が高いことが手具を伴う難度においても多様に行えることになる。

3) ボール種目の要求要素について

手具要素については、ボールの種目について見て

表3. 採点規則によるボールの手具に求められる要素

1992年年度	1994年年度				
<p>基礎要素群(各2回行う)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・投げ ・つき ・ころがし <p>その他の要素群</p> <ul style="list-style-type: none"> ・まわし ・振り ・手でボールを保持しながらの動き <p>構成に要求されるもの</p> <p>各手具の自由演技に共通の一般的要求の他に、以下のものを含まなければならない</p> <p>a)さまざまな種類の投(腕の振りを入れるまたは入れない)</p> <p>b)さまざまな種類のころがし</p> <p>c)さまざまな種類のバウンド</p> <p>d)片手でボールを保持しながらの動き</p> <p>注意: ボールの演技では左手での3つの難度、及び左右の平均した使用</p>	<p>基礎要素群</p> <ul style="list-style-type: none"> ・振りまたは押しによる投げ ・つき ・床または身体上での自由なころがし <p>その他の要素群</p> <ul style="list-style-type: none"> ・バウンド ・回旋、8の字運動 ・身体の一部上でのボールのバランス <p>構成に要求されるもの</p> <p>各手具に共通の一般的要求の他に、以下の要求に答えるものでなければならない</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな投げ ・いろいろなつき3回、そのうち1回はリズムカルなつきのシリーズ ・いろいろな自由なころがし3回、そのうち1つは身体上での長いころがし ・回旋、8の字運動 ・身体上でのボールのバランス。 ・左手のB難度 ・左右の手の使用の均衡 <p>ボールの構成に要求される主要な要素</p>	<p>難度</p> <p>Aの4要素</p> <p>Bの1要素</p> <p>Bの1要素</p> <p>Bの1要素</p> <p>Bの1要素</p>	<p>必須の身体の動きの要素</p> <p>・選択</p> <p>・Bレベルのジャンプ</p> <p>・Bレベルのピボット</p> <p>・Bレベルのバランス</p> <p>・選択</p>	<p>手具の基礎要素</p> <p>・各種の投げ</p> <p>・各種のつき3回、うちリズムカルなつきのシリーズ</p> <p>・各種のころがし3回、うち身体の上での長いころがし1回</p> <p>・回旋と8の字運動</p> <p>・身体の一部でのボールのバランス</p> <p>・バウンド</p>	<p>左手</p> <p>B難度</p> <p>+ 左右のバランス</p>

みると、1982年には基礎要素群2回行い、投げ、つき、ころがし、他の要素群では、まわし、振り、保持となっている。1994年になると、投げ3回、つき3回、ころがし3回、回旋、8の字運動、身体の一部でのボールのバランス、バウンド1回づつとなっている。

身体の一部でのボールのバランスであるが、これはより高い多様の技術の要求である。更に手具要素を伴う難度が増えている。ころがしは、3回でその内身体の上での長いころがし1回が必要である。つきも、3回でその内1回はリズムカルなつきのシリーズが必要である。

操作を規定することは、難度の実施の正確性をより必要とする。また、いままでは手具操作を無視して難度要素が行えたり、手具が静止してしまう事があった。

手具を静止させないことは身体運動と手具操作の一致、つまり、徒手要素と手具要素が調和している

ことにつながる。

採点規則がより多様に高度に変化して徒手能力や
手具操作のみが発達するとサーカスのような専門的
技術になってしまう危険性がある。

従ってこの手具と身体の調和ということは新体操発
展や将来の指針としても重要であると思う。

2 ボール演技の解析結果

ロサンゼルス大会のロリー・ファン選手と山崎浩

表4. オリンピック・ロサンゼルス大会のロリー選手と山崎選手の徒手内容

選手名 徒手内容	ロリーファン(カナダ)		山崎 浩子 (日本)	
	ステップ	歩 フォローステップ シャッセ	1 0 4	歩 フォローステップ シャッセ
ジャンプ	フルターン 鹿ジャンプ 回転反りジャンプ ジャンプターン 左右開脚ジャンプ	1 1 1 1 1	ホップジャンプ 変形ジャンプ 開脚ジャンプ 連続開脚ジャンプ 連続ジャンプターン	1 2 1 1 1
ピボット		0	パッセ1回転 その他	1 1
バランス	Y字バランス 脚持ちバランス	1 1	アラベスクバランス	1
柔軟	MGバランス (前方開脚に伴う胴の 後屈) 後屈	3 1		0

表5. オリンピック・アトランタ大会のセレブリヤンスカヤ選手と山尾選手の徒手内容

選手名 徒手内容	エカテリーナ セレブリヤンスカヤ (旧ロシア)		山尾 朱子 (日本)	
	ステップ	歩 シャッセ	1 3	シャッセ その他のステップ
ジャンプ	ジャンプターン バックルジャンプ 連続ジャンプターン	1 1 1	左右開脚ジャンプ 鹿バックルジャンプ 反りジャンプターン ジャンプターン 3連続	1 1 1 1 1
ピボット	手の支持なし足上げ ピボット アチチュード ピボット フェッテピボット	1 1 1 1	フェッテピボット アチチュード ピボット	1 1 1
バランス	膝支持バランス 前方バランス Y字バランス 変形バランス	1 1 1 1	Y字バランス コンビネーション バランス 前方開脚バランス 変形バランス	1 1 1 1 1
柔軟	MGバランス (前方開脚に伴う胴の 後屈) もぐり回転	1 1	もぐり回転 背筋の柔軟	1 1

子選手、アトランタ大会のエカテリーナ・セレブリ
ヤンスカヤ選手、山尾朱子選手のボールの演技を記
号により表にしたのが表4と表5である。

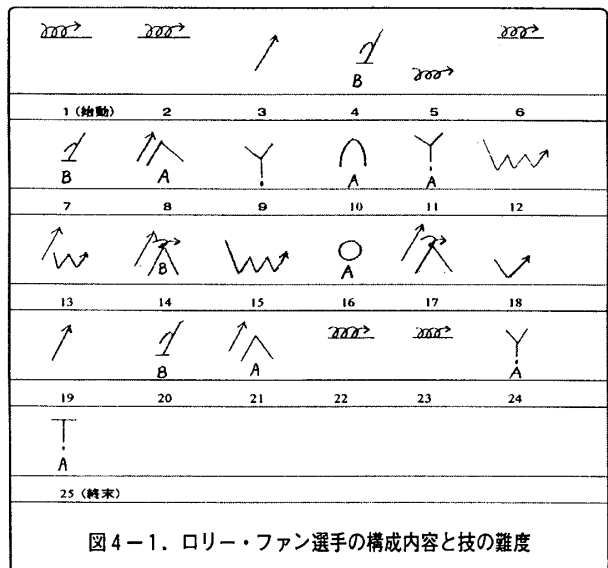
ロリー選手は徒手要素の中ではジャンプが最も多
く5回あり、次に柔軟、バランスとなっておりピボ
ットが1回しかない。ジャンプの種類は4種類であ
り、全て異なるジャンプをしている。また、鹿ジャン
プと回転反りジャンプのコンビネーションは他の
選手にない組み合わせの技術を必要とする高度なジ
ャンプである。

ピボットが1回しかない点については徒手の要素
のバランスに欠ける。バランスの違う種類が2回あ
り、MGバランス (Modern Gymnasticsの略) が3回
も見られた。MGバランスは、前方開脚をしながら
上体を後屈し、バランスを保つ動きである。

ロリー選手のMGバランスは踵とを着いたまま行
っていた。ピボット以外では、徒手内容は2種類以
上が含まれて構成されている。

山崎選手はジャンプが多く5種類のジャンプが入
っている。また、連続開脚ジャンプ、連続ジャンプ
ターンと、連続した技術により、変化とスピードの
ある構成にしている。ピボットは2回あるがバラ
ンスは1回であり柔軟は0回である。

ピボットは回転が正確に行われていない。バラ
ンスも柔軟性がないために高い位置に脚が上がらず、
明確に保たれていない。脚を振り上げてすぐ降ろす
ものがほとんどである。この点は徒手の内容が区分



されて要求がなされていないこと、各々の徒手要素のレベルが明確に採点規則に示されていないことに起因したものと思われる。

1 (始動)	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24
25 (終末)					

図4-2. 山崎浩子選手の構成内容と技の難度

1 (始動)	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24
25 (終末)					

図4-3. エカテリーナ・セレブリヤンスカヤ選手の構成内容と技の難度

構成内容については図4-1~図4-4でわかるようにロリー選手は、A難度7個、B難度4個を上回って多く入っている。手具要素では、投げが7回、つきが4回、その内3回はリズムカルについている。ころがしは6回あり身体の上をころがしたり床面をころがしたりしている。要求されている手具要素は十分に満たしているといえよう。

1 (始動)	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18
19	20	21	22 (終末)		

図4-4. 山尾朱子選手の構成内容と技の難度

これらの手具要素は、演技中に偏りなく配分されており、優れた構成方法である。

山崎選手は、A難度6個、B難度4個でこれも規則の数を上回って多く入っている。手具要素では、投げが6回、つきが5回、その内2回がリズムカルなつきである。つきのある場所も、前半、中間、後半と平均的に入れている。

ころがしは、6回あり身体の上や床面と多様に入っており要求されている手具要素を多く入れた構成である。

優勝者のロリー選手はジャンプ力、柔軟性に優れ、空間での姿勢や柔軟の形が明確に行われている。山崎選手はジャンプが多く、空間の高さはあるが空間の姿勢が不正確で美的でない。

柔軟の徒手要素が0回であることは、運動能力の不足によるものであり、構成に偏りをもたらししている。しかし、ロリー選手も山崎選手も演技の動きと音楽とは調和している。

難度については、1982年の採点規則では十分に入っていた。ロリー選手は、同じ要素を何回も繰り返し取り入れていることが構成の技術として変化を乏しくしていると考えられる。

1994年では同じ難度を何回繰り返しても1個と数えるようになり、それだけ内容が多様になり能力も高まってきていることがわかった。

移動の方法としてロリー選手は、小走り、歩があ

るが無駄な足の移動があり美しさに欠け合理的ではない。

山崎選手は難度よりも動きに重点があり、機敏な動き、独自のステップ、スピード感があり、独創的な構成となっている。難度の偏りをなくし大きさ・美しさがあるとより優れた構成となる。手具操作が不確実であるところも改善されると良いと思う。

手具要素は採点規則で定められた内容を満たしてはいるが、徒手要素を伴わずに投げるのみで、投げてからジャンプするなどの方法を取っており、徒手要素と手具要素との関連が深いことが望ましいと考える。また、採点規則にもまだ取り入れられていなかったので手具操作と難度要素が同時に行われていない。これは、徒手能力も優れていて正確に実施でき、手具操作も確実でないとできないのであろう。この点を考えて見ると、12年間の技術面の発達や運動能力の発達、手具操作の向上の表われであると思う。それは、外国の選手においても日本の選手においても同様である。

次に、アトランタ大会における優勝者エカテリーナ・セレブリヤンスカヤ選手と山尾朱子選手の徒手内容を比較した。

セレブリヤンスカヤ選手は、ステップが4回、歩とシャッセステップで実施が正確であり合理的で無駄な足の運びがない。また、美しく実施されている。

ジャンプ、ピボットが3個づつで種類は全て異なる。特に手の支持なしピボットは、他の選手にあまり見られない高度な技術である。

バランスは4個で構成中最も多い徒手である。1982年では片足でのバランス1秒間は、中級難度であり、爪先立ちで2秒間バランスを保つと、高級難度とされていた。徒手要素は偏りなく十分に取り入れられている。

山尾選手はステップが6個と多く、ジャンプが5個とセレブリヤンスカヤ選手より多くの種類が入っている。多様でありジャンプ力が優れている事がわかる。バランスも4個あり全て異なる形で構成されている。全体を通し偏りなく十分に入っていることがわかる。

構成内容の難度要素では、セレブリヤンスカヤ選

手は、B難度9個・D難度1個で、うち左手によるB難度は4回あった。

投げ、つき、ころがし、等の操作を伴う難度も入っている。その他にころがし7回、投げは7回、つきは4回、うち1回はリズムカルであった。数は多いがころがしは前半に集中している。手具要素は数多く多様に取り入れられており、偏りはない。

ジャンプは、空間姿勢の大きさ、正確さ、美しさがある。バランスは高い位置に脚を保ち、正確に止まっている。ピボットも720° 正確な姿勢を保ちながら回転している。この選手が幅広い高い能力を持つことを示している。

手具操作は、手の延長上に大きく使用し、伸びやかなゆとりのある演技を実施している。

山尾選手はB難度5個・C難度2個・D難度2個で多くの難度を取り入れている。

優れたジャンプ力を生かしてジャンプでのD難度を入れコンビネーションのD難度とC難度を入れ難度を多く構成している。

手具要素では、投げが5回つきが5回そのうち1回はリズムカルなつきである。ころがしが4回あり、配分も偏っておらず、バランスの良い配分をしていることがわかる。

徒手要素の柔軟が少ないので、柔軟性を高めピボットの種類をより多く取り入れバラエティーに富んだ構成ができるともっと良いであろう。

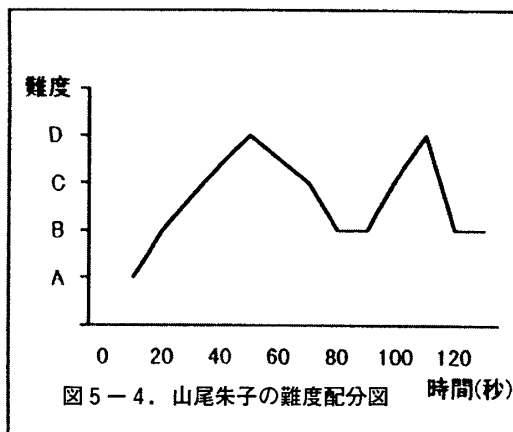
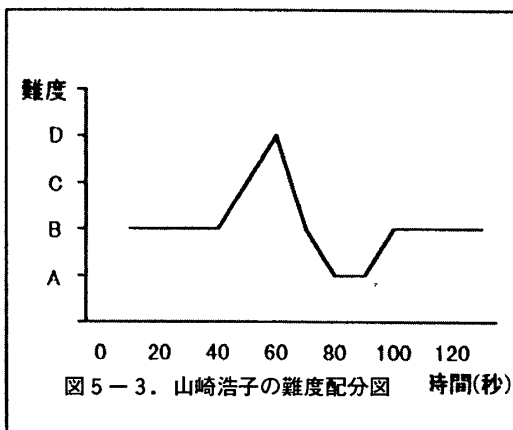
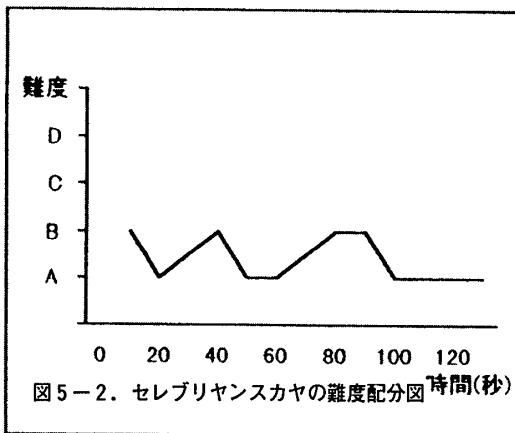
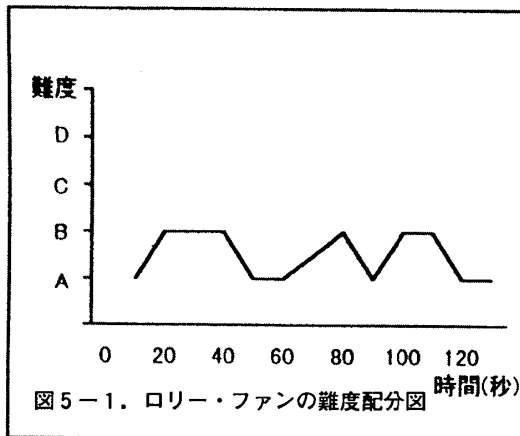
実施では、足の美しさを加えるとよりよい演技の実施となるであろう。スピードがあり躍動感、迫力があり、日本的な音楽で日本的なポーズを取り入れるなど日本人としての独創性を生かして構成されている。

難度の数は規則に定められた数をみたしており、更に多種類のジャンプや、バランスなどで組み合わせによる難度も効果的に取り入れている。

移動は大きさ、スピードはあるが、計算されたステップや移動の美しさ、正確さがあると更によくなるであろう。

難度の配分についての結果は、図5～図8の通りである。

ロサンゼルス大会については、中級難度をAとし、



高級難度をBとして演技時間中のどこの部分に難度が配分されているのかを図に示した。

ロサンゼルス大会のロリー選手は、B難度が前半40秒以内に2個・80秒近くに1回・ラストに2回と比較的平均して難度が配分されている。山崎選手は、40秒までに2個60秒過ぎに2個で配分は偏らなくなされている。

アトランタ大会においては、セレブリヤンスカヤ選手は、前半B難度を連続し、40秒過ぎに最高のD難度、その後A難度になり後半B難度の連続で構成されている。ロサンゼルスに比べ全体的にB難度が配分されてそのなかにD難度、A難度が入っているという形になっている。

山尾選手は山場が2回あり、40秒過ぎに最高のD難度をいれ、それからC難度とB難度をいれ更に後半にもう一度C難度、D難度を入れ、最後にB難度という形になっている。これは、演技の山場が2回あり変化に富んだ効果的な構成となっており、優れた構成方法である。

セレブリヤンスカヤ選手は、徒手能力が高く、幅広い難度要素を取り入れているが、複雑な組み合わせやオリジナリティが不足している。また、スピード感溢れる動きが少なく、連続的な運動も少ない。これらの点が改良されるとより優れた構成となるであろう。

Ⅳ まとめ

選手の運動能力が次第に発達し、手具操作の技術の進歩と相俟って、10点満点が頻繁に出ることが生じ、採点規則は度々改正されてきた。技術のみに追われ個性や芸術性を失う危険性があったからであろう。

1982年と1994年の採点規則の変化は次のような点である。

- ・点数配分のうち、構成点と実施点が5.00点と5.00点で平等の価値を持つことになった。
- ・採点方法は減点式だけでなくボーナス点により加点方式が取り入れられた。
- ・難度価値が中級難度、高級難度の2種であったが、

A・B・C・D難度の4段階になった。

- ・徒手の難度の内容が詳細になり明確に図示された。
- ・構成に要求される内容が高度になり多くなった。
- ・徒手要素、手具要素の選択や、空間使用、力動感(ダイナミズム)において、多様性が必要になった。

構成要素として必要とされている項目は、ロサンゼルス大会・アトランタ大会を通して、ほとんど変化していないことがわかる。

徒手要素と手具要素の選択が重要であり、この2つの調和が新体操の真髄であるといえる。アトランタ大会では、難度のレベルや内容が高度になり、徒手要素、手具要素の技術が高まり美しさも増した。また、構成要素をバランス良く取り入れなければならなくなったことは、構成の偏りをなくし、より変化に富んだ構成を生むことになった。

しかし、動きの個性、変化のある演技はロサンゼルス大会と比較して減少してきている。このことは、要求される内容が高度化し、増加したために構成のなかに取り入れることが困難になってきたためと考えられる。両大会ともに変わらず徒手要素と難度要素がもたらす価値は高く重要である。

従ってより良い構成のためには、徒手要素と難度要素を十分に取り入れること、実施は正確に行うこと、徒手要素と手具要素の調和をはかり難度の選択や配分を偏らなくすること、多面に渡り、多様性のあることが優れた構成方法につながるのである。

今後、新体操個人演技が構成要素と採点配分により、どのように変化するのかを更に追求したい。

注1) 新体操においてリスクを冒すということは、主として、手具との接触を失うことである。ミスなしに実施された最低2つの異なるリスク要求に対して0.10点のボーナス加点がある。

注2) 熟練度とは手具を扱う技術と身体の動きの技術が完璧に、かつ同時にコントロールされていることで0.10点のボーナス加点がある。

参考文献

- ・日本体操協会 F.I.G新体操採点規則 1982年度版
- ・日本体操協会 F.I.G新体操採点規則 1994年度版
- ・遠山喜一郎他 共著 「女子の新体操」 1980年 大修館書店
- ・高橋衣代 「新体操競技の個人演技における徒手要素と難度要素に関する研究」 1997年 第48回 日本体育学会発表資料